

序章 国民統合の言語から国際語へ

——英語の自意識とコンプレックスを映す綴り字改革運動

12

第一節 本書のねらい——なぜ綴り字改革運動を論じるのか

12

第二節 先行研究と本書の構成

16

第三節 英語綴り字の不規則性と綴り字改革論の基本的な考え方

22

第一部 基礎教育の効率化をめざした綴り字改革論者たち

——読み書き能力獲得と国民統合の十九世紀

27

第一章 代表的綴り字改革論者アイザック・ピットマンの生涯——速記考案者の読み書き改革

28

第一節 綴り字コンテストの時代の綴り字改革運動家

28

第二節 アイザック・ピットマンの生涯

38

第三節 ピットマンが十九世紀の綴り字改革運動に与えた影響

53

第二章 ロンドン学務委員会の請願運動——綴り字改革運動と『読み方教授法報告書』

64

第一節 基礎教育関係者たちの綴り字改革運動

64

第二節 物理化学者ジョン・ホール・グラッドストーンと請願運動

81

第三節 ロンドン学務委員会における議論

84

第四節 『読み方教授法報告書』（一八七八）の意味

95

第五節 国民統合時代の国家・教育・言語と綴り字改革運動

105

	第三章 綴り字改革公開会議に集まった人々――基礎教育、言語研究、社会改良のために――	112
	第一節 綴り字改革公開会議（一八七七）――	112
	第二節 英語綴り字改革協会の活動――	123
	第二部 言語の科学的研究を志した綴り字改革論者たち	
	――十九世紀の言語学者・音声学者を中心に――	129
	第四章 世界の民族と言語を探究したロバート・レイサム――比較言語学隆盛の十九世紀――	130
	第一節 言語学者ロバート・レイサム――	130
	第二節 『イングラントとアメリカの著述家への呼びかけ』（一八三四）――	133
	第三節 「表音式綴り字の原則」（一八五九）――	143
	第四節 『表音式綴り字の擁護論』（一八七二）――	149
	第五節 『英語』と綴り字改革論――	154
	第六節 翻字・音声表記と綴り字改革論――	159
	第五章 言語学会公認の「英語綴り字の部分的修正案」――OED編纂の時代――	169
	第一節 言語学会と綴り字改革論――	169
	第二節 フライとエリスの綴り字改革論（一八七〇）――	173
	第三節 スウィートと「英語綴り字の部分的修正案」（一八八二）――	178
	第四節 言語学会公認案の行方――	192
	第五節 マリーのOED編纂と綴り字改革論――	200

第六章	十九世紀イギリス音声学の発展と綴り字改革論	205
第一節	音声学の歴史と綴り字改革論	205
第二節	スウィートの『音声学提要』（二八七七）	212
第三節	国際音声記号の確立まで	217
第三部	「世界語」に完璧を求めた綴り字改革論者たち——二十世紀の展開	225
第七章	簡略綴り字協会と国際語としての英語——大英帝国のなかの綴り字改革論	226
第一節	国際語としての英語と二十世紀の綴り字改革論	226
第二節	アメリカの簡略綴り字委員会とイギリスの簡略綴り字協会	232
第三節	第一回帝国教育会議とカナダ連邦ノヴァスコシア州の例	242
第四節	インド教育官僚マーク・ハンターの綴り字改革論	258
第五節	請願書のなかの「帝国」と「国際語」	268
第六節	ニュースペリング考案	277
第八章	綴り字改革関連法案の審議	285
第一節	綴り字改革法案（一九四九）	285
第二節	簡略綴り字法案（一九五三）	292
第三節	モント・フォリックの遺言による教授ポスト設置	297

第九章	バーナード・シヨアの遺言と英国アルファベット公募	305
第一節	シヨアと綴り字改革論	305
第二節	アルファベット改革に関するシヨアの遺言	309
第三節	英国アルファベット公募	314
第四節	ジェームズ・ピットマンとシヨアの遺言執行	317
第十章	初期指導用アルファベット導入の顛末——ジェームズ・ピットマンの実験	320
第一節	初期指導用アルファベットの実験的導入	320
第二節	初期指導用アルファベット財団の普及活動	335
第三節	公的報告書での評価と普及活動の衰退	338
第四節	綴り字改革運動史のなかの初期指導用アルファベット	342
	結びにかえて	346
	注	351
	写真・図版などの出典	371
	あとがき	373
	参考文献一覧	400
	十九—二十世紀英語綴り字改革運動史年表	404
	索引	412